

9. 「信徒奉仕職」って、どんなものがあるの？

では具体的に、信徒奉仕職としてどのようなものがあるのでしょうか。そのおおよその分類の仕方の一例として、「信仰からの奉仕」と「信仰への奉仕」という分け方があります。そして、これら二つの積極的な働きかけによる奉仕に対して、秘密な意味での奉仕職とはいえません。存在としての奉仕と呼ぶことのできる奉仕があることも忘れてはなりません。

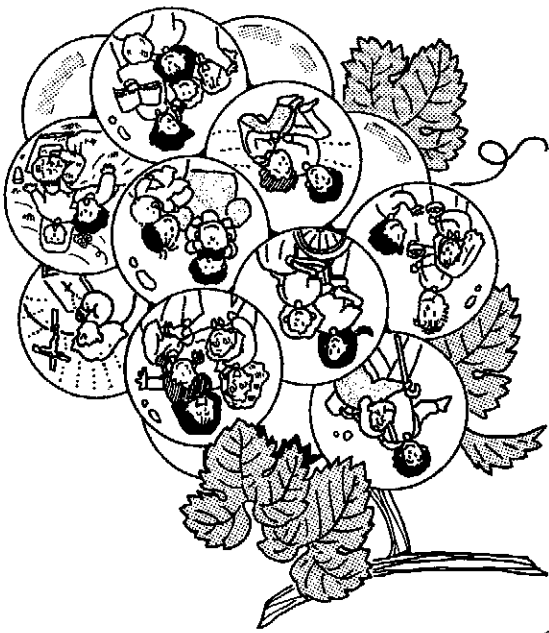
ただし、このような大きな分類はできても、さらに具体的な種類となるとあらかじめ決めることはできません。それは、時と所によって生じる必要性に応じて、その都度新たなものが定められ、また反対に必要がなくなれば廃止されるからです。それがどうなるかは、これから実際に取り組んでいく中で見えてくるでしょう。

a) 「信仰からの奉仕」は？

私たちがキリストの生き方にならおうとするとき、「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」(マタイ 25:40)という言葉に込められた、困窮に出会い苦しんでいる人たちの必要に応えようと努めることはとても大切です。

具体的な内容としては、高齢者や障害者とともに生きること、育児や青少年などの教育、さまざまな困難を抱える個人や家庭、地域社会への支援、在日、滞日外国人との連帯、平和や人権、貧困など、政治、経済にまつわる問題への力かわり、などなごさまざまな分野が考えられます。要するに、奉仕の対象としては、人間が生きる現実のあらゆる場に可能性があり、時のしるしを見分けて取り組む必要がある領域といえるでしょう。

このような「信仰からの奉仕」は、私たちにとっては信仰をもとに生まれてくるものですが、信仰を持たない人たちも同じような活動を行っており、働きかける対象や働きそのものはどちらとも同じである場合がほとんどです。



ところで、教会が社会における少数者である日本では、このような奉仕をするとき、カトリック以外の善意の人びとにも連帯し行動することはとても大切です。教会がほかに無いものを提供できる場合は、関わる人びとをそれだけ豊かにすることもできるでしょう。反対に、教会外の人びとからイベントや協力を受けることにより、教会がさらに大きな奉仕を行う可能性が開けることも少なからずあります。多くの人びとと交わることで、人びとへの奉仕をより発展させていくことが必要です。